

思想史学の問い方 ―二つの日本思想史講座をふまえて―

大会委員会

日本思想史学会はシンポジウム形式による大会を積み重ねてきました。ことに近年では、対象とされる「時代」や認識されるべき空間など、法論的な問いかけに意識的な主題が目立つように思われます。それは、文学や社会史、歴史研究、メディア論等、方法および対象を架橋しようとする意識的な領域設定であったり（二〇一四「死者の記憶―思想史と歴史学の架橋」、二〇一三「越境する日本思想史―思想と文学の垣根越え」）、もつと直截に、思想史研究としての方法や対象についての「問い」「問い直し」への試み（二〇〇八「戦前と戦後―思想史から問う」、二〇〇五「転生する神話―「日本思想史」は描きうるか」）であったり、あるいは「思想史」という方法に自覚的であることを通じ、それぞれの立脚点から対象を俯瞰しようとする試みであったり（二〇〇七「日本思想史の問題としてのキリシタン―思想と暴力」、二〇〇九「日本思想史からみた憲法―歴史・アジア・日本国憲法」、二〇一一「カミになる王―思想史の視点から」）等、大会シンポジウムならではの多彩な試みが、意欲的に取り組まれてきたと言えるでしょう。

ところで本学会の創設は一九六八（昭和四十三）年十一月であり、節目の時期を迎えます。ちょうど折よく、本会会員が様々な形で責任編集や執筆陣をはじめ、広く関わりを持つ日本思想史を冠する二つの講座（岩波書店『岩波講座 日本の思想』全八巻、ぺりかん社『日本思想史講

座』全五巻）の刊行が、完結を迎えつつあります。主題別と時代別という、編集方針を全く異にする両講座は、ともに個別実証研究の水準をふまつつもそれらを超えた、日本思想史としての「全体」に取り組む意欲的な試みであることをも明記しています。では日本思想史研究という営みの問われ方は、戦後のアカデミズムのなかでどのような位置を占め、何を発信してきたのでしょうか。

二〇一五年大会シンポジウムでは、個々の主題の学説史から少し距離を置いた形で戦後の思想史学の歩みや主題のよって立つ知的文化的文脈の編まれ方を俯瞰し、この二つの講座を足がかりに、「問い方」という観点を設定することで、「日本思想史研究の思想史」を試みたいと考えました。そうした営為が改めて、アカデミズムとしての日本思想史を豊かにするものと考えられるからです。ご報告者のお二人にはそれぞれ、両講座の編集経緯やまさにアカデミズムとしての思想史学の固有性や歴史性も鑑みつつ、今後の日本思想史研究が共有すべき課題につながるような問題提起を、他方、コメンテーターの皆さんには、報告者の主旨に即しつつも、各自の問題関心からの応答を、両講座への感想も踏まえたかたちでお願いしています。ご報告の概要については次頁を御覧ください。参加者の皆さんからの積極的なご議論もふくめ、実りある会を期待する次第です。

シンポジウム報告

戦後の近世思想史研究をふりかえる

田尻 祐一郎

『日本思想史講座』（ペリかん社、二〇一二年）の近世の巻の「総論」で、私なりに、戦後の近世思想史研究の整理を試みた。そこでは世代的な観点から、「〈近代〉」を探る―丸山眞男―「〈伝統〉」と向き合う―相良亨と源了圓―「〈近代〉」を問い返す―安丸良夫と子安宣邦―という柱を立てて、各世代を代表し、研究の枠組みを作った研究者の問題関心を探ってみた。今回、あらためて研究史をふりかえる機会を与えられたので、別な視点から、問題を考えてみたい。

その視点とは、「〈主体〉」と「〈構造〉」をキーワードとして、研究史を「〈主体〉」論的発想によるものと「〈構造〉」論的発想によるものに二分して、それぞれの系譜の展開を（戦前の業績にも論及しながら）検討してみようということである。私見によれば、「〈主体〉」論的発想は、研究者と対象との間に強い共鳴があつて思想史研究固有の迫力をもつが、近代的な価値観から対象に迫るといふ性格を免れがたい。他方、「〈構造〉」論的発想には、現代の知的構造を歴史的に相対化させ批判的な見方を得るといふ醍醐味があるが、上手な説明で終わってしまうという面もあると思われる。

討論を通じて、今日の私たちが立っている場所についての相互理解を深められればと思う。

シンポジウム報告

二つの日本思想史講座と日本思想史の問い方

末木 文美士

『日本思想史講座』（ペリかん社）と『岩波講座日本の思想』（岩波書店）の二つの講座に編集委員として関わった立場から、それぞれの講座の意図と反省点を論じ、そこから今日の日本思想史研究のあり方に関して問題提起をしたい。①ペリかん社版に関して、直接担当した第二巻（中世）を中心に、近代主義の終焉後、どのように中世思想史が構築されるかを、資料としての寺院聖教の位置づけ、ならびに従来の思想の枠で捉えきれない儀礼などの扱い方を中心に検討する。②岩波書店版に関しては、近代アカデミズム研究の到達点を示すと同時に、その枠組みが解体している状況を踏まえ、日本思想史の遺産をどのように今日生かしているかという問題意識から編集した経緯とその結果を総括する。特に、直接担当した第五巻（身と心）、第七巻（儀礼と創造）を中心に検討する。③その上で、やや雑駁であるが、「日本思想史」のあり方に関して、いくつかの問題点を取り上げ、多少の提言をしたい。それは、「日本思想史」と「日本哲学史」の同異、中世・近世・近代がそれぞれ孤立して研究され、その連関が欠けているという問題点、さらに「日本思想史」の形成過程において、従来取り上げられる村岡典嗣・津田左右吉・和辻哲郎らの他に、一方で皇国史観や国体論、他方でマルクス主義の影響を考えなければならず、とりわけ皇国史観や国体論の果たした役割に関する検討が不十分である点、などの諸問題である。